

## 進捗状況の概要（1ページ以内）

## 1. 学内の実施体制

諸施策の検討のために前年度まで設けていた6つのワーキング・グループの一部を廃し、その機能を既存部署業務に移行した。また、アクティブ・ラーニング&アセスメントオフィスが事業推進の中心として検討し、学長以下で構成し本学の内部質保証の責任を負う「学部長・研究科長会議」、担当副学長がセンター長を務める「教育イノベーション推進センター運営会議」に諮った後に各部署に依頼する通常のラインに沿うよう体制・機能を変更することで、学長のリーダーシップのもと教職学協働による円滑な事業推進を可能とした。

## 2. 中心となる取組

前年度より全学で試行しているコース・ナンバリングのメンテナンスを実施するとともに、4月より新LMS（学修マネジメントシステム）、Scombを稼働した。Scombは教材配布、課題の授受、小テスト、アンケート、ネットワーク・クリッカーなどの機能を有しており、様々なタイプのアクティブ・ラーニング授業に活用している。また、アクティブ・ラーニングのさらなる推進のため、LMSの活用に関するWS（ワークショップ）、反転授業やルーブリック評価などに関するWSを開催した。

学修成果の可視化の取り組みとして、SITポートフォリオのダッシュボードに成績やGPA、PROG、TOEICスコアの推移やCEFRレベル判定など様々な学修履歴の可視化を行ったことで、学生が学修履歴とその成果を容易に確認できるようになった。さらに、Webシラバスに各回の授業前後に必要な学修時間を明示した。また、一部の学生に授業外学修時間を詳細に記録するポートフォリオを作成してもらい、実質的な授業外学修時間の把握とともに、SITポートフォリオの使い勝手や感想などの意見を収集した。

## 3. 取組の成果

工学部、システム理工学部、建築学部においては旧来マークシートで実施していた学生による授業アンケートをScombで実施し、回答の集計から担当教員へのフィードバックまでにかかる時間を大幅に短縮した。これにより改善を早期に次期の授業に反映することが可能となり、授業における質保証をより有効なものとした。各種WSや教授会での普及活動を通じて、Scombの利用教員は増加しており、今後、授業での活用例などを充実させて広報すること等により、さらなる授業改善の進展が期待できる。また、意見収集した学生の一部からは、SITポートフォリオにおいて学生自身の学修成果が容易に確認できることに対しては、助かるという声が多くあった。一方で学生への認知度はまだ低く、機能の拡張に対する意見も多くあり、今後の広報活動とさらなる機能改良を進めていく。

## 4. 補助期間終了後の継続発展に向けた取組

本事業補助金終了後の継続発展に向け、事業で雇用する特任教員2名の人件費を平成30年度から自己収入から充てることとした。また、1.学内体制に記したように本事業の推進を既存部署の平常業務・意思決定系統に組み込んだことで、事業終了後も創立100周年（平成39年）に向けた大学戦略「Centennial SIT Action」を通じたPDCAサイクルの展開により、本事業の取り組みを継続発展させることを可能とする体制を整えた。

## 5. 学内外への波及効果

本事業で得られた成果を平成28年度に文部科学大臣より教育関係共同利用拠点の認定を受けた「理工学教育共同利用拠点」の取組や平成26年度に採択された「スーパーグローバル大学（SGU）創成支援事業」の取組に適用することで、学内および国内の他大学への波及に努めている。また、国内の工科系大学と連携する「工大サミット」において、加盟大学間で教育改革の内容や教育IR情報を共有することにより、教育プログラムとその学修成果に関する定量的なデータに基づく大学教育改革を、工科系大学間で連携して進めている。